

### 千本松大橋

千本松大橋は、周辺地域の発展と市中央部の交通混雑の緩和を目指して、木津川の最下流にあった千本松渡し(架設計画当時一日に 8000 人近い人と二輪車を運んでいました)の位置に建設されました。

この橋は大正区南恩加島と西成区南津守を結ぶ長さ 323.5m、有効幅員 9.75m(歩道幅員 2.25m)の大阪では初の「らせん橋」で、昭和 48 年 10 月に完成しました。橋の中央部の高さは 36m で、水面からマストまでの高さ 34m の船なら、楽に通行できます。橋の両サイドに坂路高架がつけられ、大正区側は長さ 452.4m、有効幅員 12.25m(歩道幅員 2.5m)となっています。

この橋の完成で、南大阪から大正区の工業地帯へ直接車の乗り入れができるようになり、これまでの市内経路の大回りが解消されました。

この橋に続いて臨港地帯には、港大橋(49 年)、平林大橋、かもめ大橋(51 年)などジャンボ橋群が形成されました。



(写真提供 (財)大阪市都市工学情報センター)

### 千本松渡船場(せんぼんまつとせんじょう)

～橋と共存する渡船～

#### 概要

このあたりは木津川の川尻に近く、江戸時代には「北前船」をはじめ諸国の船が盛んに出入りしました。幕府は舟運の安全のため、大阪市章のもとになった「湊標」を数多く設置するとともに、防波堤として、

天保 3 年(1832 年)には長さ 1.58km に及ぶ大規模な石の堤が築かれました。

千本松の名の由来は、この堤防に植えられた松並木によっていて「摂津名所図会大成」に「洋々たる蒼海に築出せし松原の風景は彼の名に高き天橋立、三保の松原なども外ならずと覚ゆ…」とあります。

昭和 48 年(1973 年)に千本松大橋が完成しましたが、現在、渡船は通学の貴重な交通手段として大正区南恩加島 1 丁目と西成区南津守 2 丁目を結び(岸壁間 230m)、運航されています。

大正区側の「南恩加島」の町名は文政 12 年(1829 年)に開発された「南恩加島新田」に由来しています。



『大正区ホームページ』から転載

